

■ 編集だより

編集後記

わが国では「人生100年時代構想会議」が提唱されるなど人生100年時代といわれる長寿の時代、かつ超高齢化の時代になった。十年一昔という言葉からすると、100年という月日はどのようなものであろう。今年(2020年)から100年前に遡ると1920年になるが、森光子さんや(プロ野球界で活躍された)西本幸雄さんが生まれた年であり、あながち遠い昔でもないかもしれないとも感じる。それとともに、われわれも長く生きる可能性があるなかで、社会に少しでも役に立つために相応の覚悟が必要な時代になったと思う。

最近、「温故知新」という言葉が気になっている。『論語』に出てくる言葉であるが、「過去の事実を研究し、そこから新しい知識や見解をひらくこと。昔の事を調べて、そこから新しい知識や見解を得ること。」(大辞林 第三版)を指しており、「故」については「こ」として「昔の、以前の事柄、古いこと」、「ゆえ」として「事の起こるわけ、理由、原因」という意味がある。

われわれが人生を歩むうえで学びが重要であるが、「先生」という言葉が「先に生まれた人」では、学ぶ対象がだんだん限られてくる。そこで、後から生まれた人々(人生の後輩)からも学ぶ必要がある。精神科医は患者さんの言葉を通じて、さまざまなことを学び続けられる特権がある。加えて精神的な臨床力を高めるためには、現在進行形的に直接的、ないし間接的に経験する症例の他に、先達による症例報告を読み取っていくことも大切である。

本誌では第110巻(2008年)4号から第115巻(2013年)4号にかけて「精神神経学雑誌百年」という企画があり、100年前の掲載論文が紹介されていた。2008年4号の連載開始の際の記事には「百年前の精神科医が、経験した一つの症例について、これだけ深く勉強し思索を積み上げていたことを知る機会となり、ある種のさわやかな感動さえ覚えた」と著者により書かれている。また、2013年4号の連載終了時には「この百年間に、確かに生物学的な発見や治療法の開発はあった。しかしながら、臨床症例を考える思考過程そのものには大きな変化はない。精神医学に関係する心理社会的な論文は百年経過した今でも読む価値が大きいと思った。」と症例報告の価値が改めて強調されていた。

フロイトは『「不安神経症」という特定症候群を神経衰弱から分離する理由について』(1894)という論文において、不安発作を記載しているが、そのほぼ全ての項目が100年後のパニック発作の診断基準(DSM-IV, 1994年)に踏襲されており、フロイトによって示された複数の症状は1世紀を経たその後の臨床観察でも実証されている。これらのことは優れた臨床知見は100年経っても色褪せないどころか、それらの知見が結晶化することでさらに輝きを増してくることを意味しているのではないかと感じる。

先の温故知新という言葉であるが、この言葉には続きがある。「故(ふる)きを温(たず)ねて新しきを知れば、以て師となるべし。」とあり、「誰かに何かを教えることができるくらいにしっかりとそのことを研究し、習熟したのならば、新しいことを知ることもできる」という意味であろうか。単なる知識を深めるだけではなく、新たなことの発見に関与して、その学問分野をリードしていく方向がより望ましいとも言える。

本当の臨床力をつけていくために必要なことの1つは謙虚に学び続ける姿勢であるが、その一方でその学びの対象を何に求めていくかも重要である。英語などの外国語を読解するわが国の精神科医にとっては、和文による過去の臨床知見をその知識に有機的に加えていくことで、その臨床知をさらに深めることができるのではと思う。個人の経験とそれを記述した報告がなされることともに、100年以上にも及ぶ先達の知恵を融合することで新たな知見が生み出される、そのような可能性が本誌にはあると思う。

谷井久志